声援の中で地元を走ったときは箱根よりうれしかったかもしれない

桃澤（もざわ） 大祐（だいすけ）さん〈25歳 中通〉

平成29年の長野県縦断駅伝では、村内を通る21区を激走し沿道を大いに湧かせた桃澤大祐さん。箱根駅伝の復路・山下りの6区を3年間走った山梨学院大学での経験を経て、現在は伊那の企業に勤務しながらトレーニングを重ね、休日には記録会やハーフマラソンなどに積極的に参加しています。

「中学のときから陸上には取り組んでいましたが、走ることに本気でスイッチが入ったのはとても遅くて、高3の4月ぐらいだったんです。アップダウンの激しい中川の環境によって足腰が鍛えられ、山下りという〝特殊区間〟に生かされたのだと思っています。昨年の縦断駅伝には友人や知り合いなどたくさんの方が応援してくれました。自分の地元の真ん中を走っていくのは、箱根を走ったときよりうれしかったかもしれません。自分の能力を伸ばすということは、自分の限界を伸ばすことだと思って取り組んでいます。ただ気をつけないと限界を超え過ぎて故障してしまうこともある。逆に抑え過ぎると限界は伸びていきません。そこを見極めながらやるしかないのが、陸上競技のいちばん難しいところです。自分はレースにたくさん出て実戦で鍛えていくタイプ。目標は東京マラソンでの入賞です」

村内でのトレーニングは、芝生が脚に優しい天の中川河川公園で。春夏秋冬、暗ければヘッドライトを点けてでも走る、走る!

時を超えて受け継がれる　あうんの呼吸

下平地区　八幡神社獅子舞保存会

300年以上の歴史を持つ下平地区の獅子舞。毎年、八幡神社の春と秋の祭典で、宵祭りと本祭りの2回奉納が行われています。

幌の中に10人ほどの氏子衆が入って舞う練り獅子は、笛と太鼓のお囃子に合わせて、神社の入り口から境内へとじりじりと階段を舞い上がっていく勇壮な獅子舞です。獅子頭は、1回の舞で3人が交代しながら務めています。

「下平地区全戸が、獅子舞保存会に入っています。平成29年の年番のときは、道中練りもやりました。獅子舞だけでなく、隈取りをした2人やひょっとこ、おかめに稚児行列や女衆も加わって大勢で地区内を練り歩きました。獅子の舞い手は勤めの人が増えたこともあって20代30代が少なく、今は50代と60代がメインでやっています。かつては頭を舞う先輩方が多くて、練習してもなかなかお宮への舞上げをやらせてもらえなかったものでしたが…」と保存会長の下澤久志さん。

下平集会所に保存されている獅子頭は3面。伝承されている舞には、幌のある練り獅子、2人で舞う悪魔払いの舞獅子、そして青い獅子頭で踊る雨乞い獅子があります。

「ちょいとちょいと」の合いの手と笛太鼓の音に促されるように、だんだんと激しく頭を振って歩み出す獅子。あうんの呼吸は、時を超えて確かに受け継がれていました。

獅子頭の後ろに数人が入り、幌を持って進む“ほろはり”のスタイル。

ものづくりの現場で緊張感を身近に体験

中川村アートセッション実行委員会

画家や工芸作家、音楽家など多くのアーティストがアトリエを構えるアートな村として、広く知られるようになった中川村。平成23年に始まった『アトリエ開放展』は、1年の小休止を経て音楽祭までを盛り込んだ『中川村アートセッション』として生まれ変わりました。

「もはやアトリエにとどまらないほどジャンルが広範囲になってきたこともあり、今年から再スタートとなりました。メンバーは移住して来た人もいればUターンした人、もともと中川に暮らしている人もいてさまざま。普段は接することのない作り手と使い手が交わる時間は、貴重だと思いますね。人気のワークショップはすぐに予約で埋まってしまいます」と実行委員の小川泰生さん。

「中川に移り住んだのは、環境に余白があると感じたからかなと思います。ものづくりの現場で緊張感を身近に体験してもらえる機会は、そうそうないですから…。それに味噌づくりとガラス工房とゴスペルと絵画とを1日で楽しめるなんて所は中川ぐらいでしょう」とガラス工房 錬星舎の池上直人さん。

村内15ヶ所のアトリエや会場には、県内外から延べ約4,000人が来場。アーティストと共に作り、描き、歌い、奏で、営む時間を堪能しました。

窯の温度は1,140度ほど。窯から出すと10秒ほどで固まり始めます。「気に入った力タチになってきたら、どこでおしまいにするか見極めるのも大事だよ…」とアドバイス。

横前地区では子どもの数がまた多くなっています

飯島（いいじま） 克也（かつや）さん〈34歳 横前〉 真由（まゆ）さん〈36歳〉

「長男がバレーをやりたいと言うので小1からジュニアバレーを始めました。子どもたちにはできるだけ制限をかけずに育てたいと思っているので、やりたいことは何でもやらせようと思っています。自分も妹3人の4人兄妹なので同じなんですよね」

飯島克也さんは、民間の林業会社で働きながら休日には兼業農家としてりんご栽培を手がけています。社会人バレーボールを通して知り合った松本出身の奥さんとの間に、元気な子どもが4人。旧宅脇に建てた新居で、お母さんの喜代子さんと2世帯同居しています。

瑛虎（えいと）くん(7歳)　杏奈（あんな）ちゃん(6歳)
星奈（せいな）ちゃん(3歳)　瑠希奈（るきな）ちゃん(8ヶ月)
喜代子（きよこ）さん(63歳)

「現在は育休中です。子育てが大変だなぁということは、実はそんなにありません。そう感じるのは、お義母さんが助けてくれているからでしょうね。中川は雰囲気がよく、近所に同年代のお母さんたちも多くてずっと暮らしてきたように話しかけてくれるので抵抗なく入れました」と真由さん。

「村の中でも横前は地域のつきあいが濃いですね。子どもの数が減った時期もあるんですが、自分たちが親世代になって帰って来ているので、子どもの数はまた多くなっています。道路はよくなりましたけど、環境としては自分が子どもの頃とほとんど変わっていません。通学中に古い山道を通ってみたりいろいろ楽しそうですよ」

平日は子どもが眠ってから帰宅することも多い克也さん。日曜日は一緒に畑に連れて行ったり庭先にコートを張ってバレーをしたり子どもたちとの時間を楽しみます。